

⑦ 708²-17/
257

委員会、三一八～三二五頁へベンガラ分析報告（参照）

阿蘇の「丹」(たん)、「ベンガラ」、「および鉄石

なか
中、他地域を圧倒するものか二つある。

・一つは「丹」(たん)「ベンガラ」であり、もう一

つは「鉄製品」である。

■阿蘇の「丹」(たん)「ベンガラ」
ベンガラ「弁柄」は、インドのベンガル地

方で産出した酸化鉄に由来すると言われている。お

り「赤色」の顔料として用いられる。

■阿蘇地方で「阿蘇黄土」と呼ばれる黄色い

土は水酸化第二鉄を焼くと、「赤色」になる

●黄土の中に含まれている鉄分が酸化して

赤色になるからである。(写真図版130・131へ阿

蘇黄土)下山西遺跡「熊本県文化財調査報告第八集、熊本県教

育委員会」阿蘇谷で大量に生産されたと考えられるベ

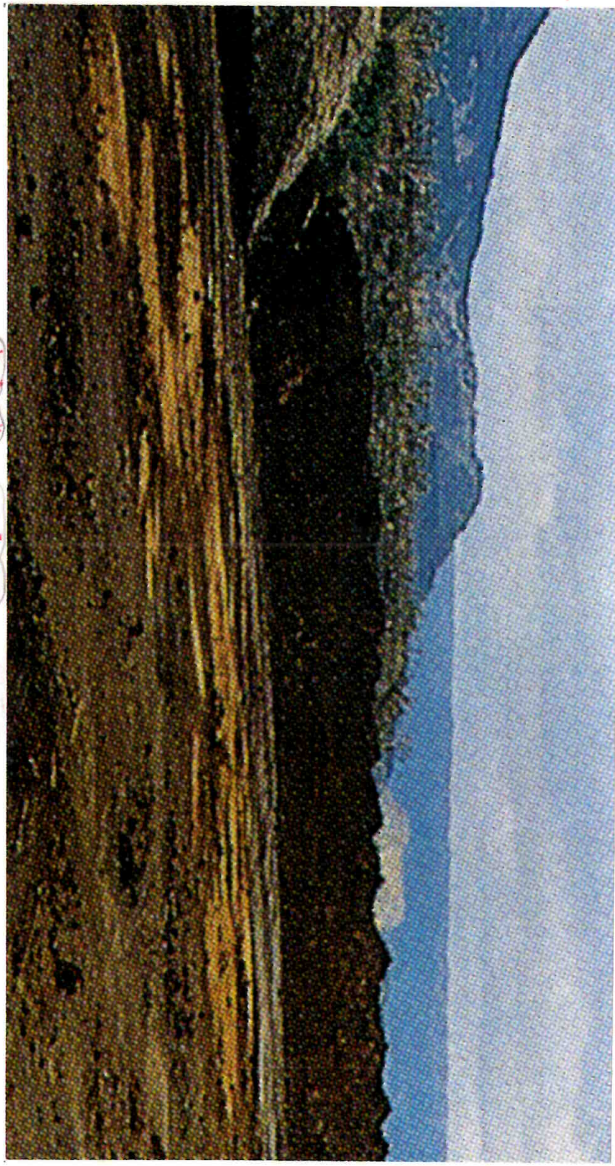
ンガラ加、どの地方へ流通したのか、現在

はっきりしないが、……将来、弥生時代の

。カラー
頁全面に、大きくはみ出して掲載下さい。

▲

カラー
↑



。暗い。
。ちやんと
明るく
に下さい。

1404

写真図版 130 阿蘇黄土 (表土を除去したところ)

683^P - 2/4

268



1404

写真図版 131 阿蘇黄土 (水酸化第二鉄)

1304

『神のむす郷、阿蘇のものか』展、熊本県文化財保護協会、45頁参照。

・カラー
 頁の全面。上下に、大きくはみ出して掲載下二行。



丹塗土器：地蔵原遺跡



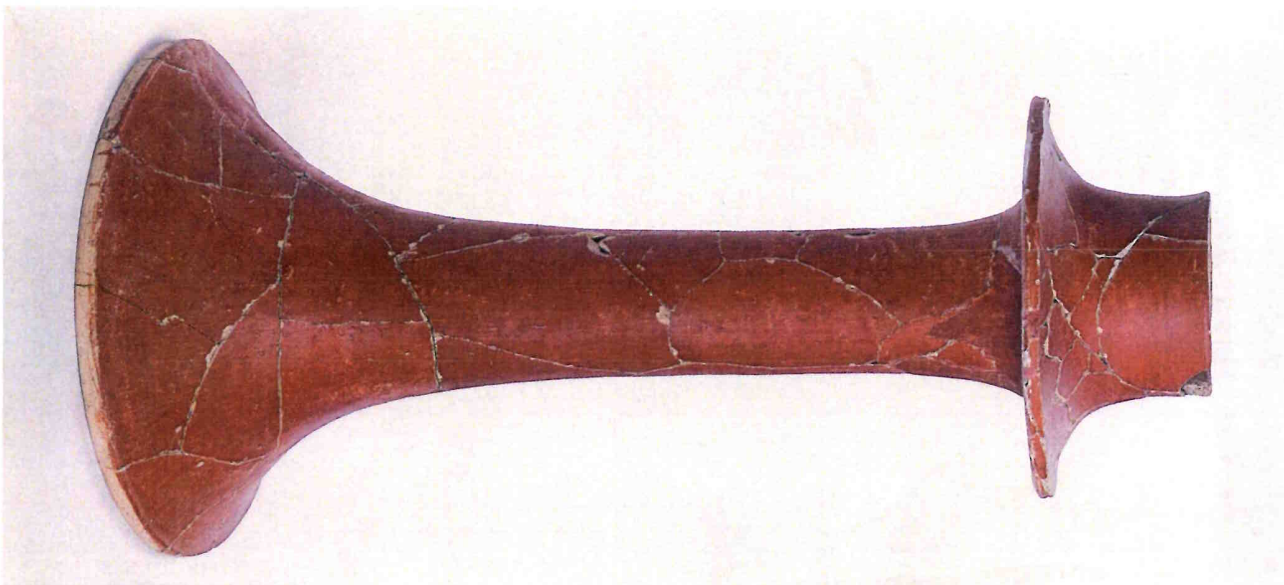
丹塗土器：地蔵原遺跡



丹塗土器：地蔵原遺跡



丹塗土器：地蔵原遺跡



丹塗土器：地蔵原遺跡



丹塗土器：地蔵原遺跡

683^p-B/4

字の大きさを
 揃えておいて
 下さい。

1404
 1204 写真図版 132 丹塗土器
 に おいて
 おおきく
 (阿蘇外輪山北麓の阿蘇郡南小国町地蔵原遺跡出土)
 1304 神のすむ郷、阿蘇のものがたり展、熊本県文化財保護協会、6頁、43~44頁参照。

あおに 青黒い土 岩緑青の古名
青丹よし 言かないと!

683^{P-4} 4^{魏志倭}
51^P

魏志倭 46^d

684^{P-1/3} 4^行

H30(2018)12.6(木)~12.6(2日)
令和元5.5(日)~5.6(3日)
令和元(2019)12.4(土)~12.5(木)(3日)
" 2(2020)8.3(月)~8.4(4日)

下8/4
8/4

(*)

な
の
記
載
な
の
で
は
な
か
う
か
と
想
像
さ
し
る
。

と
ば
ら
し
て
い
る
。

・ 定
か
て
な
い
か
下
へ
阿
蘇
盆
地
内
で
と
し
る
丹
ハ
ン
ガ
ラ
に
つ
い
て
の
記
載
な
の
で
は
な
か
う
か
と
想
像
さ
し
る
。

と
記
し
た
山
に
は
丹
有
り
し
。

と
こ
ろ
で
。

参
考
ま
で
に
、
丹
塗
土
器
の
写
真
を
掲
載
し
て
み
よう
。

阿
蘇
地
方
と
、
他
地
域
と
の
交
易
状
況
が
明
確
に
な
る
か
も
知
れ
な
い
。

ヤリかん
金也 ⑥684^p-4/5
下 684^p-1/5

神のすむ郷3ヶ所ルビ有る

⑥686^p-2/6
see! ⑥685^p-4/4 149~
【阿蘇の丹】
⑥683^p-1/4

阿蘇の鉄

阿蘇の弥生ムラが他地域の弥生ムラと決定

的に導うのは、鉄製品が多いという二と

である。(以下、「神のすむ郷、阿蘇のものかた

り展」熊本県文化財保護協会、四六、五〇頁参照)

・例えば、

(1) 下山西遺跡からは、一六三点

(2) 狩尾遺跡群からは、三一八点

(3) 小野原A遺跡からは、一二〇点以上

もの鉄製品が見つかっている。

鍬等の武器、手鎌(鉄製の穂摘み具)や

鎌などの農具、刀子や鉋等々の工具として

鉄は弥生時代に広く用いられているようになった。

ただ、鉄製品の量(再生の為に熔かす)

たりせず、今日まで残存している鉄製品の量

は、日本各地を見ても、そんなに多くない。

阿蘇地方で出土する鉄製品の多

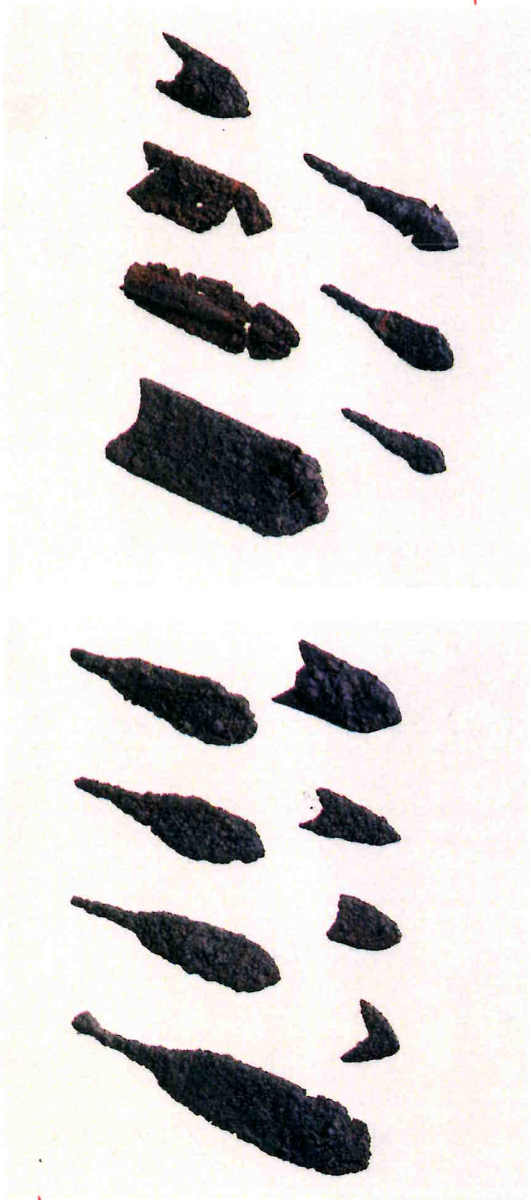
① 以下の鉄製品を、
左右両面に掲載下さい。

矢少 砂州遺跡
⑥ 6891-9/11 右土砂 2段 24



鐵鏟：下山西遺跡

684^P - 2/5



鉄鏃：狩尾湯の口遺跡

鐵鏟：狩尾池田・古園遺跡

阿蘇盆地出土6鉄製品

神のすむ郷、^(x)阿蘇のものかたし展』熊本県文化財保護協会、46〜50頁参照。

水全部、至地下に揚裁下シ。
左右両面に揚裁し、その

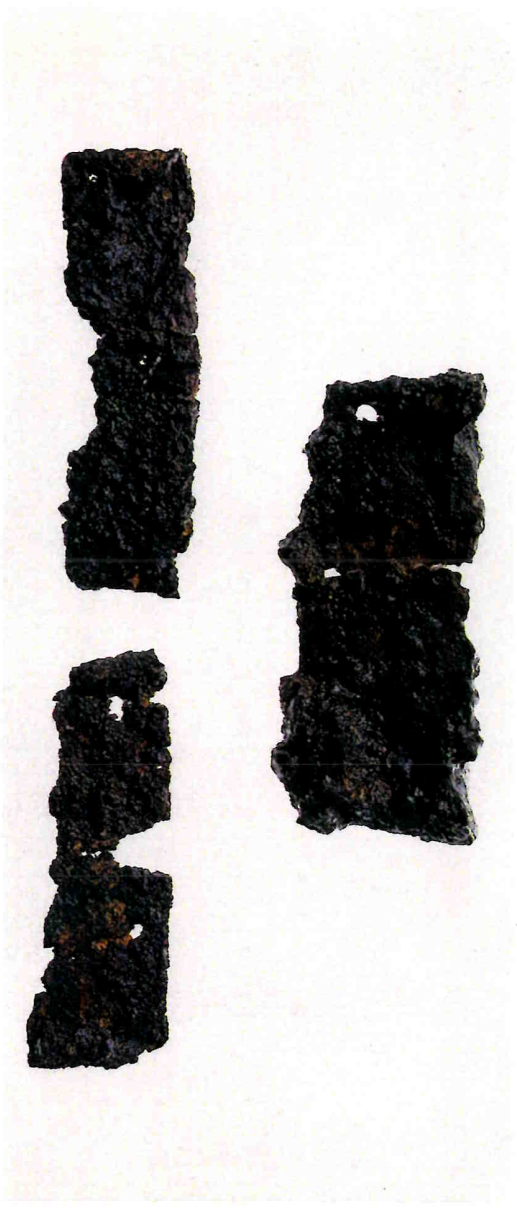
$$X_{\text{int}}^{\text{int}} = (x) \cap (x^2) = (x^2)$$

成川士の株式 ⑤ 689-5/6 字英因版 135

よき

1304 てがま 鉄製手鎌と てがま 鉄鎌

- 1304。弥生時代後期の収穫用道具には、鉄製手鎌と鉄鎌があった。
- 鉄製手鎌は、鉄の板【軟性（ねばり強さ）のある鉄の板】の両端を曲げてその内側に木の板をはめ込み、石包丁と同様、穂を揺みとる道具として用いられた。
- 鉄鎌は、現在と同く、稲や草を刈り取る道具として使用された。



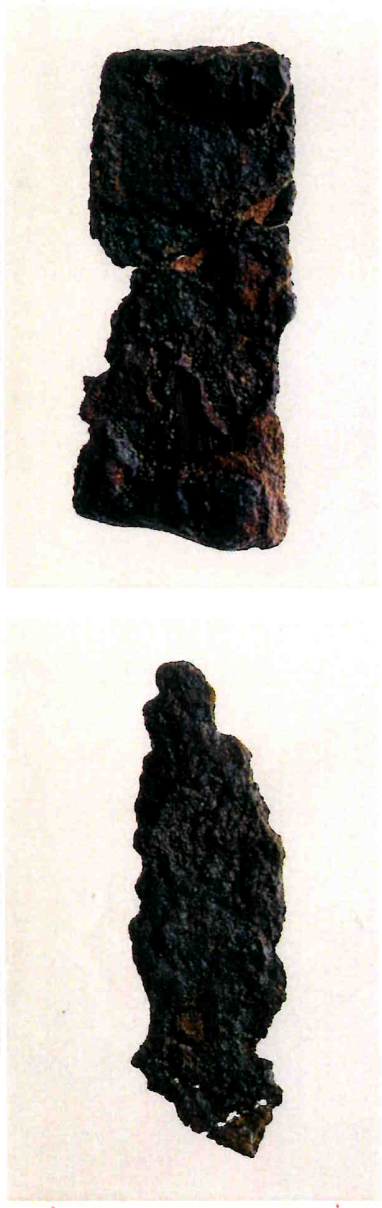
鉄製手鎌：下山西遺跡

273

684^p-3/5



鉄製手鎌：狩尾池田・古園遺跡



鉄製手鎌：狩尾湯の口遺跡

鉄鎌：下山西遺跡

中程の
前頁の
AN移す

打子

カサ



鉄鎌：下山西遺跡



鉄製鉄先又は鋤先：下山西遺跡

⑩ へら ⑪ ちき

684^p-4/5

カサ



鉋：狩尾湯の口遺跡



274

鉋：狩尾池田・古園遺跡

1304

ヤリカサ ちき おこき
鉋 と 刀子

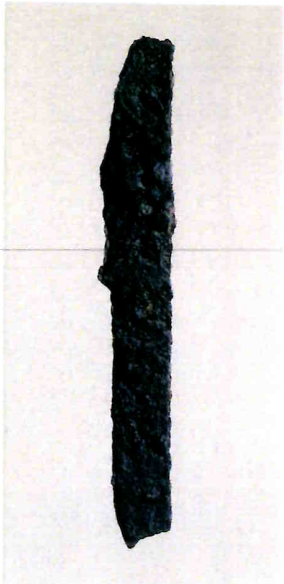
鉋、
カサ
にて
い。



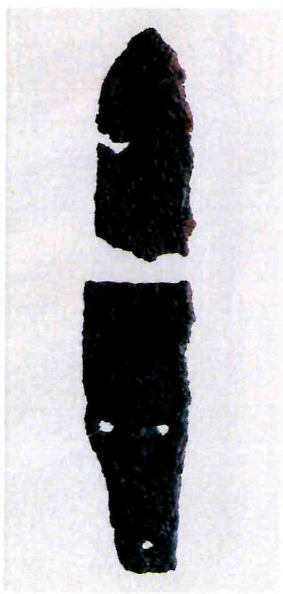
鉋：下山西遺跡

13. 木材などを加工するための鉄の道具として、鉋と刀子がある。
鉋は、木材の表面を仕上げするための道具で、木の柄の先端に取り付けて用いられた。池田・古園遺跡で出土した鉋には、木片が付着していた。
刀子（小刀）も木材を加工する際に用いる道具で、やはり、木や鹿骨の柄に固定して使用された。

木材の加工（A）の7

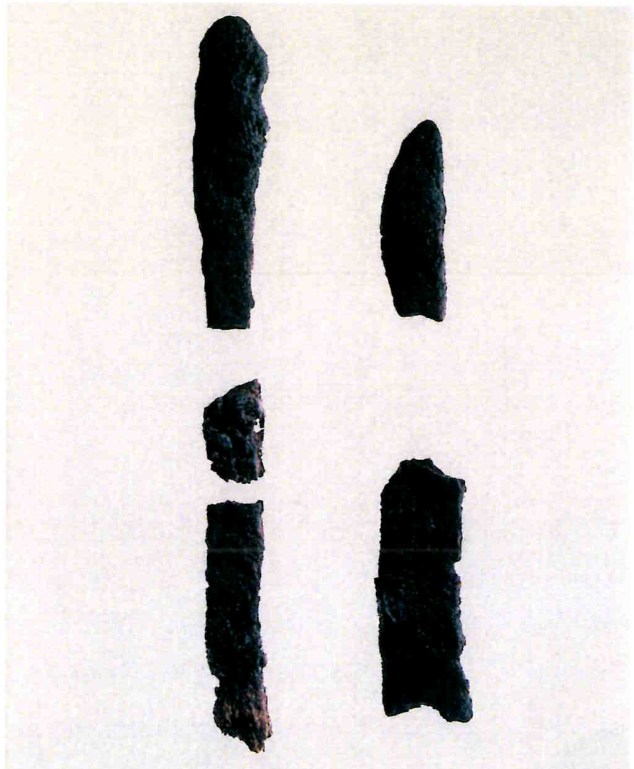


刀子：狩尾湯の口遺跡

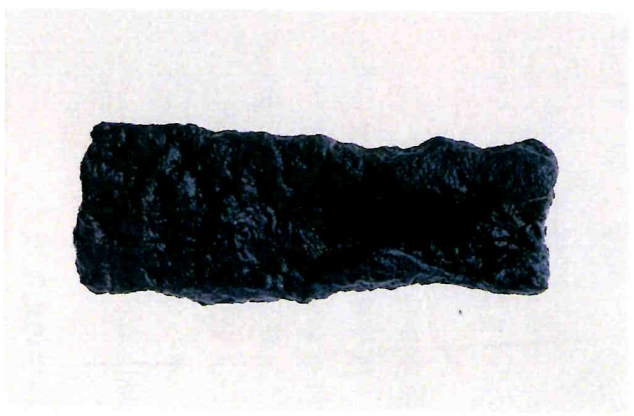


刀子：狩尾湯の口遺跡

684^P-5/5



刀子：下山西遺跡



鉄斧：狩尾湯の口遺跡

275



鉄斧：狩尾湯の口遺跡



鉄斧：下山西遺跡

* こんどにも多くの鉄製品が収められたと 684P-1/

685P-1/4

687P-2/6
登り場

683P-3/4 まで

阿蘇のものがたり展 49頁

改行
行ったのか不明
ここから行っているのか

さには、目を見はるものがある。

④ 阿蘇盆地で産出する褐鉄鉱と、阿蘇地方の遺跡から見いだされる豊富な鉄製品をこれらは何を意味しているのだろうか。

不明瞭な点も多いか、思うところを述べてみよう。

④ 参考文献は、次の通りである。

① 神のすむ郷、阿蘇のものがたり展は熊本県文化財保護協会、二〇〇六年一月二四日発行。

② 狩尾遺跡群は熊本県文化財調査報告第一三一集、熊本県教育委員会、一九九三年三月一日発行。

③ 下山遺跡は熊本県文化財調査報告第八集、熊本県教育委員会、一九八七年三月発行。

阿蘇谷での弥生人の暮らしは、弥生中期(前)一〇〇年後五〇年)までさかのぼる。

・それは

半字分あける

半字分あける

かりおかたむた
狩尾方無田遺跡で見いだされた竪穴住居跡に代
表されるが、この二つの遺跡の数はあまり多
くない。
①一三七頁。②一二二一―三頁参照
種族は分らないし、褐鉄鉱を採掘して
たのかどうか不明である。

弥生後期になると、遺跡が急増する。
(1)阿蘇谷(五岳の北側の谷)では、狩尾遺跡
群、下山西遺跡、小野原A遺跡、下扇原遺跡
陣内遺跡などがトールあづら小る。
(2)南郷谷(五岳の南側の谷)でも、同時期の
柏木谷遺跡や南鶴遺跡が見つかり、
という。(①一三七頁参照)
あるいは、極南界の倭奴国の領有権が阿蘇
地方へ及んだ時以降、
阿蘇系殷民の子孫達が、阿蘇盆地の処々
で大量の褐鉄鉱を掘り出すようになった。
トールののではなからうか。(第3表参
照)

阿蘇系殷民の子孫達は、阿蘇谷や南郷谷の
谷底部分から、褐鉄鉱や阿蘇黄土(ベンガラ

隅丸長方形の

志生はた 実録 83
妻木 暁田 480-19/21

の原料も採つていたのであろう。
 褐鉄鉱の大半は、人吉盆地や霧島山北麓の
 地へ運ばれていったと思われる。
 一かゝ阿蘇盆地内の居住域で、昔ながらに
 鉄器を作る場合もあったようだ。(第13表
 の13。第135図の8・10・11・12参照)
 家屋内の床面上や、竪穴の上縁部分には、
 鍍をはじめとする多くの鉄製品が置かれてい
 たのであろう。(写真図版83へ竪穴式住居
 参照)

住居周辺のあちこちに、焼土や炭化物の山
 があり、これらの廃棄物の山は、時と
 ともに、一層高くなつていったに相違ない。

(第三章「安永田遺跡」参照)

ところから、弥生後期のある時、阿蘇山が噴
 火し、異臭や降灰が甚だしく、住民らは、
 何もかも打ち捨てて逃げ出したのかも知れな
 い。

第七章「足掛り」の項(阿蘇山の噴火)参照

阿蘇盆地内からだけ、弥生後期の鉄器が多数出土するといふ
 のだから、阿蘇山の噴火を考えてみたい。

なお、第3表によれば、倭国大乱(西七二一八八)以降、

⑦ $416^{-2/6}$

685^P - 4/4

see! ⑤ $684^{\circ} - \frac{1}{5} 399 \sim$

かす事件は、^{いけん}九州地方に^{いん}住すむ^ふ扶余系^{いんみん}殷民の子孫^{しそん}達^だを^{おひや}訪^{おもひや}ひ

よう
う
に
見
受
け
ら
れ
る。
のち
で
周
辺
一
帯
から
掘
り

窪め
ほう
水
て
い
る
住居
の
凹陥
部内
へ
焼土
炭

免田式土器をはいめとする

破片
○
〔
鑿
穴
上
縁
部
に
置
か
れ
て
い
た
〕
鉄
器
等

土砂と共に流水に入ってきたと解される。

その後、
あたり
一帯^{いったい}
が農地^{のうち}
となり
、
幾^{いく}

度と
となく耕さぬ
ことによつて、
廃棄物の山

はなになり、
 立てあな
 式住居の
 上方部分
 も消え失

せてしまった
た

と
いう
次
第
な
の
で
は
な
か
ら
う
か
。

子
一
てⁿ
、
↓
}
、
}
、
}

他^たち^ちの^の阿^あ蘇^その^の弥^や生^{せい}ム^むう^うと^と比^ひべ^べ水^{みづ}は^は際^{さい}立^たつ^つて^て多^{おほ}
 地^ち域^{いき}の^の弥^や生^{せい}ム^むう^うと^と比^ひべ^べ水^{みづ}は^は際^{さい}立^たつ^つて^て多^{おほ}
 へ^へ阿^あ蘇^その^の弥^や生^{せい}ム^むう^うで^で出^い土^どす^する^るへ^へ鉄^{てつ}製^{せい}品^{ひん}は^は

[illegible]

ろ
う

そう思はせる遺構や遺物にたいして、日本人の

なから 見み
て み
よう
ぽ

双柱穴が
変化したのか？

播種期
苗床1/1
6P. 1~2P

住居中心部近くに、
 方形の炉が有る。深さ三二センチ。
 は、多量の草本類の炭化物を含む埋土が見ら
 れる。
 ド状遺構は、西と北隅に設けられてお
 概ね五呎の高差を有する。
 南東壁中央部分にほぼ掘り、不整形に浅く
 掘りくぼめ、その内に一対の小穴を穿つ。
 * 確証は無いが、
 へ松菊里型住居内の楕円坑長軸両端にあった

山一 号住居跡は、
第Ⅱ調査で、
平面視、ほぼ正方形形。

山一 号住居跡は、
第Ⅱ調査区の東端にある。
(第170・171区参照)

次 次 南

卷之四
詩集
五言古詩
五言律詩
五言絕句
七言古詩
七言律詩
七言絕句
雜詩

在式
木器
分布
图
①
15
第
169
图
周
边
地
形
图

約
一
〇
〇
ト×
ⅣⅠ
の
河岸段丘上にある
ト
第
Ⅳ
号


 狩尾、湯の口遺跡は、
 西流する白川の北側

阿蘇五岳の南麓を

弥生後期の狩尾・湯の口遺跡

七

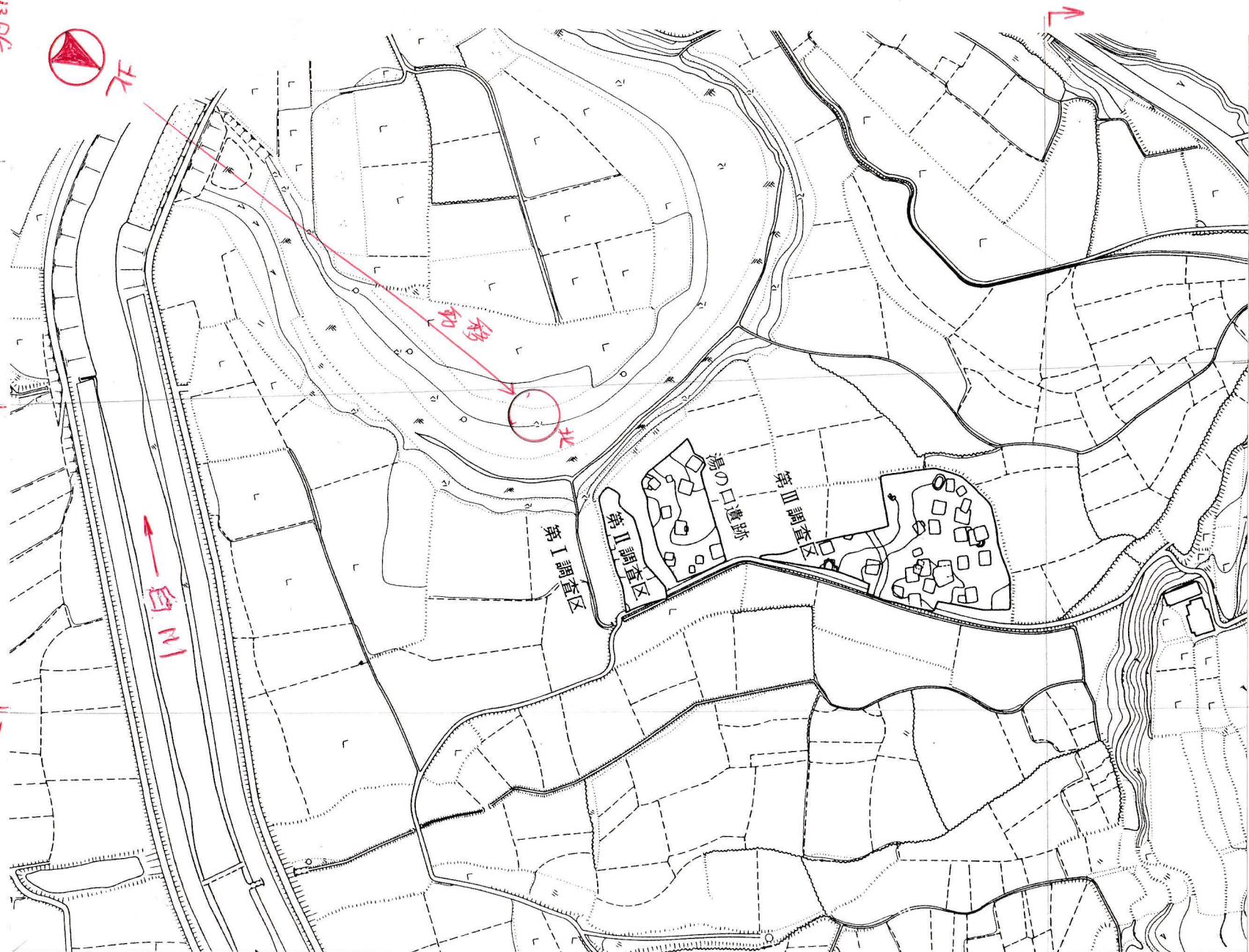
右頁の右端、上下段に
また加えて大々掲載下さい。

カマ

カマ

カマ

686P-2/18



1384

1284

1284

第169図 狩尾・湯の口遺跡周囲地形図

※30p11

『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、4頁参照。
北が高く、南の黒川の方へなだらかに低くなっている。

(第3巻) 281

✓
H
th
[x]
o
T

・上・下段に於て

大主^レ搗載

TH No. 11

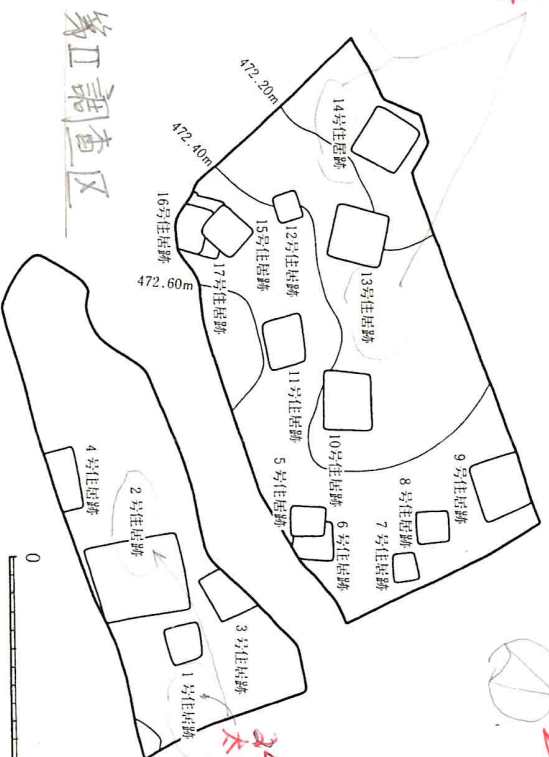


平角

太い子4-1

686^p - 3/11

25所
太4
コ4



24所
太いゴ4

字が かす水でいいよ。
明瞭に見えるようにして
おいて下さい。

太"了

第二調查區

1326 第170 ☒

狩尾・湯の口遺跡弥生時代遺構配置図

後期



1264

* 例、38号住居跡内から、縄文時代の石釜が出土した。(廃墟とされた後に入り込んだ"可能性もある")

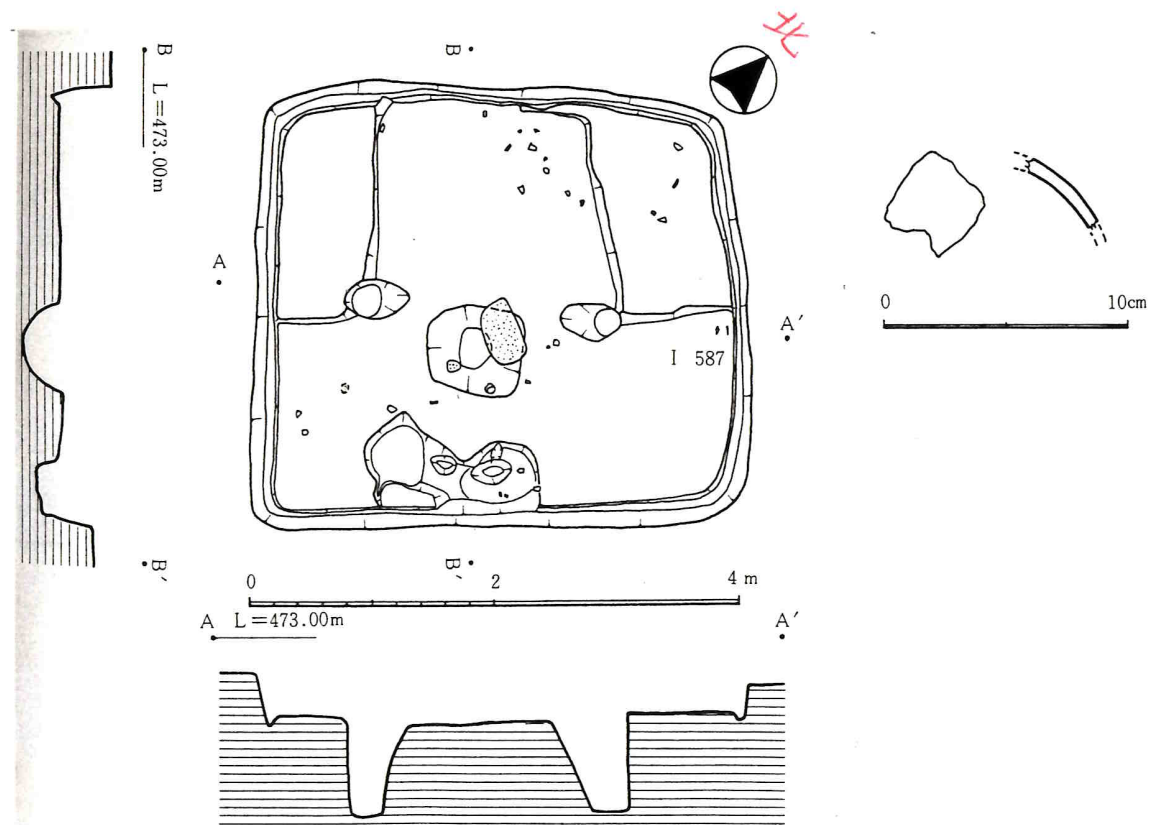
『狎尾遺跡群』熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、21~22頁参照。

半字分尸

・左頁の上半分に、大抵掲載
下さい。

686²4/11

北を追加しておいて下さい。



1489 第171図

狩尾・湯の口遺跡1号住居跡実測図

1389 『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告[✓]第131集、熊本県教育委員会、21～23頁参照。
半分アケル

北を向か

にのいて

下をい。

左の

下半分に

大きく掲載

下さい。

686^p-5/11



1304

1404

第17図

狩尾・湯の口遺跡2号住居跡実測図

『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、24頁。

1204 『神の志郷、阿蘇のものかた展』熊本県文化財保護協会、49頁参照。

① 321-2/2 ② 686P-7/1264

686P-6/11

② 685P-1/4 焼

HIV

二つの小穴が、―――遙かな時を経て、様式を少々変えながら、はなからうかゝる。と想像される。

木全部ではないが、伊から少し離れた所に二つの小穴を設けた創が甚だ多い。(2) 二四三八

四〇、六五、七一、七二頁(他参照)

一号住居跡からの出土遺物は、少量の土器と、床面に出土した器種不明の鉄器一点である。(2) 二頁参照

同遺跡第Ⅱ調査区中央部の

② 二号住居跡について、

う。(第170頁図参照)

・一、竪穴式住居の底部分は、北隅一个所のみか隅丸、他三个所の隅は角張っており、平面視ほぼ方形の大型住居である。九・四二m×八・四四mを測る。(1) 四九頁。(2) 二二―二四頁参照

箕子達の支配下に置かれていた当時(前一八〇年)前九七五(ころ)、扶余系殷民の子孫達は、隅角方形の竪穴式住居も作るようになった。

ただ、竪穴式住居の上面部分は四隅ともに隅丸だった可能性があらう。

③ $3 \mid -\frac{z}{2}$
 -12

コクヨ ケー20 20×20

686-12/12 39
免田式路 柱穴の中より

686-8/11 686-2/12

大 覆土 415P1/8 16行
中 中 中
カウ

小型の重弧文長頸壺（第○図の3に示す免田式）
居住内北隅部の柱穴（P11）の中層には
と解される。
ち込んだ
式住居の凹陥部内（北壁と中央との間）へ落
焼土や炭化物が、雨・風に押し流され、竪穴
（2）そこで、住宅の北側に積み上げられていた
だらかに低くなつて、南の黒川に白かつてな
路一帯は、北が高く、南の黒川に白かつてな
（1）第○図から分かるように、狩尾・湯の口遺
跡係があるのだろう。
※これは恐らく、狩尾・湯の口遺跡の地形と
る。
の北壁と中央との間に限定的に分布している
以下、焼土と炭化物が夥しく、特に、住居跡
の北壁と中央との間に限定的に分布している
差異が観察される。
各壁に沿つてこの字の形に巡るが、本来四隅に
設け、追加的に接続したとみられる。色調に
差異が観察される。
居住跡の覆土（埋土）を調査すると、中層
以下、焼土と炭化物が夥しく、特に、住居跡
の北壁と中央との間に限定的に分布している
※これは恐らく、狩尾・湯の口遺跡の地形と
跡係があるのだろう。
（1）第○図から分かるように、狩尾・湯の口遺
跡一帯は、北が高く、南の黒川に白かつてな
（2）そこで、住宅の北側に積み上げられていた
だらかに低くなつて、南の黒川に白かつてな
路一帯は、北が高く、南の黒川に白かつてな
（1）第○図から分かるように、狩尾・湯の口遺
跡係があるのだろう。
※これは恐らく、狩尾・湯の口遺跡の地形と
る。
の北壁と中央との間に限定的に分布している
以下、焼土と炭化物が夥しく、特に、住居跡
の北壁と中央との間に限定的に分布している
差異が観察される。
各壁に沿つてこの字の形に巡るが、本来四隅に
設け、追加的に接続したとみられる。色調に
差異が観察される。
居住跡の覆土（埋土）を調査すると、中層
以下、焼土と炭化物が夥しく、特に、住居跡
の北壁と中央との間に限定的に分布している

カウ

$\sqrt{686 - \frac{1}{2} \times 12}$ の 12

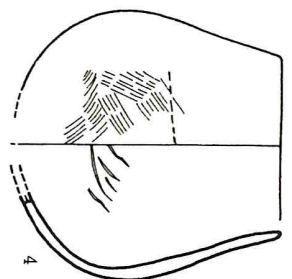
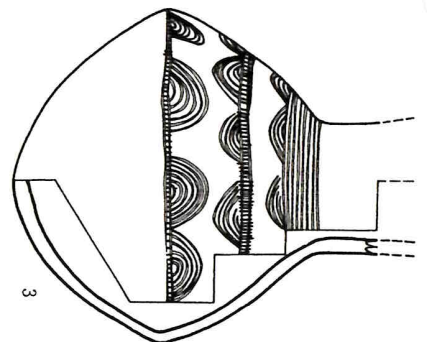
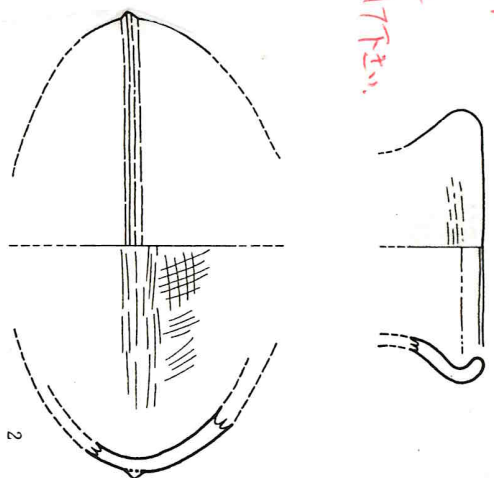
式土器の破片と、円錐台付き甕形土器の下
半部（第○図）のなかに有った。これらの小破
片が腐れて出来た空洞部に、これらの小破
片が入り込んでいたものと思われる。
■ 炉と南壁の間の床面には、小鉄片が集中し
て分布する。このあたりが、鍛冶に要する作
業空間とみられる。
■ そのほかの鉄製品は、住居跡北半の土器溜
り部分に散在し、鉄片のほか、鉄鏃が目立
つ。これらの鉄製品は、前者の分布と性格を
異にし、土器片と共に出土した。
* 家屋が放棄された後、北の方から住居の北
半部へ、焼土・炭化物・土器片などか
ん落下した。―― 竪穴式住居の上縁部に置
かれていた鉄片や鉄鏃などの重たい物さえも
押し出されるようにして落ち込んだのだろ
う。
トール
（2）号住居跡出土の土器（第○図）
■ 2は、袋状口縁の長頸壺である。1号、14
号住居跡からも同一個体とみられる破片が出土

右頁全面に
掲載下さい

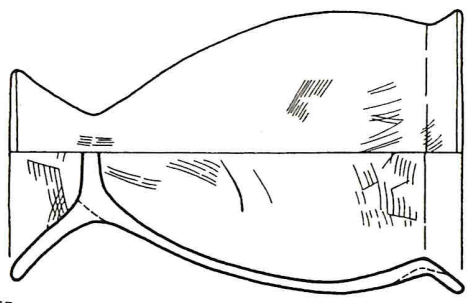
数字を
下で17下さい

次頃
39へ
床面とちや
柱穴の中

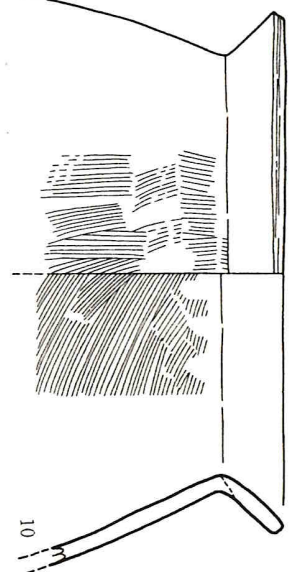
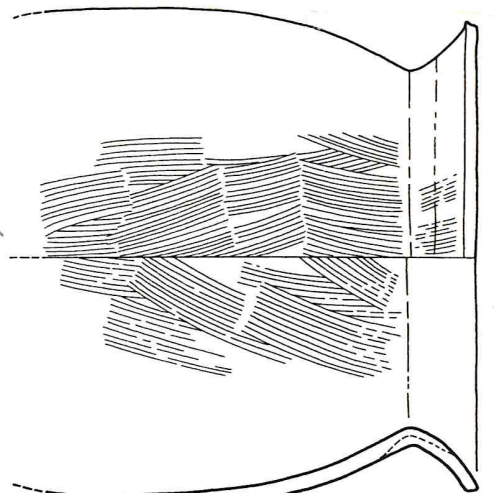
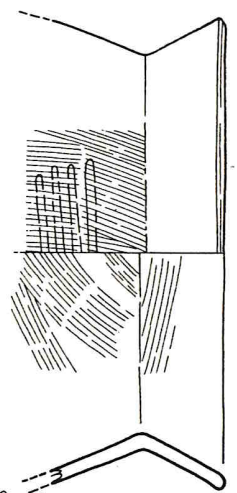
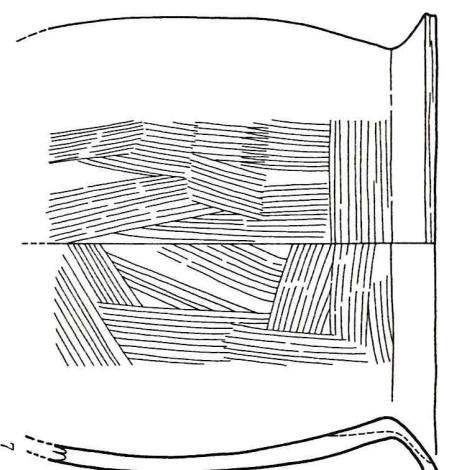
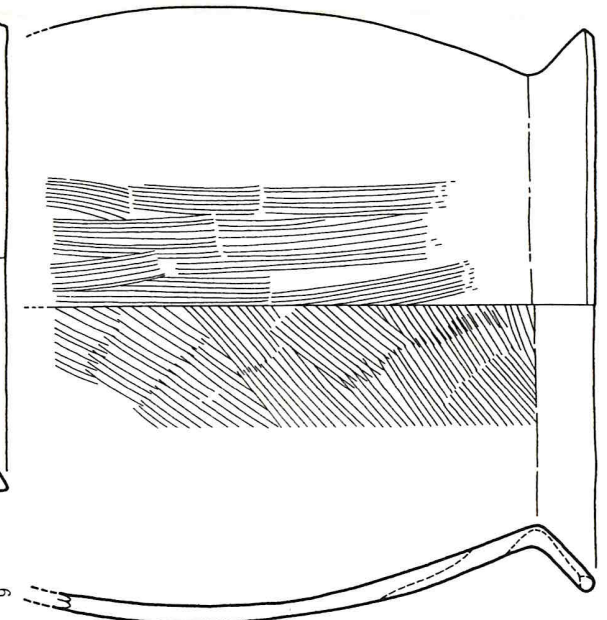
全面に



0 10 20cm



686P-10/11



1304

1404

第173図

狩尾・湯の口遺跡2号住居跡出土土器

『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、26頁参照。
※分P414

686^P-11/11 (欠番⑥ 686^P-11/12)

⑦ 686-8/12 20斤

2号经片, 7"7" 11V

ト
ル

■3は、重弧文を有する長頸の小さな壺形土器（免田式土器）である。床面上および柱穴の中から見出しされた。長頸部のほとんどを欠く破片として。

米毀れた土器を住居内に置いておく筈はないのだから、この免田式土器も住む者のためになくした後に、転がり込んできたのである。

■5は、かなり小型の甕形土器である。

米元からこの住居内にあつたのか、外部から入ってきたのか、分からない。

■9は、下層出土の甕形土器である。外面には、八ヶ目調整の下に口々々々の痕跡が観察される。

■13は、表面で見出しされた下半部を欠く壺形土器である。内外面は八ヶ目調整だが、外面に若干の口々々々が残存する。

■15は、床面上の長頸部分である。外面上部は赤褐色に下部は黒色に彩色し

ト
ル

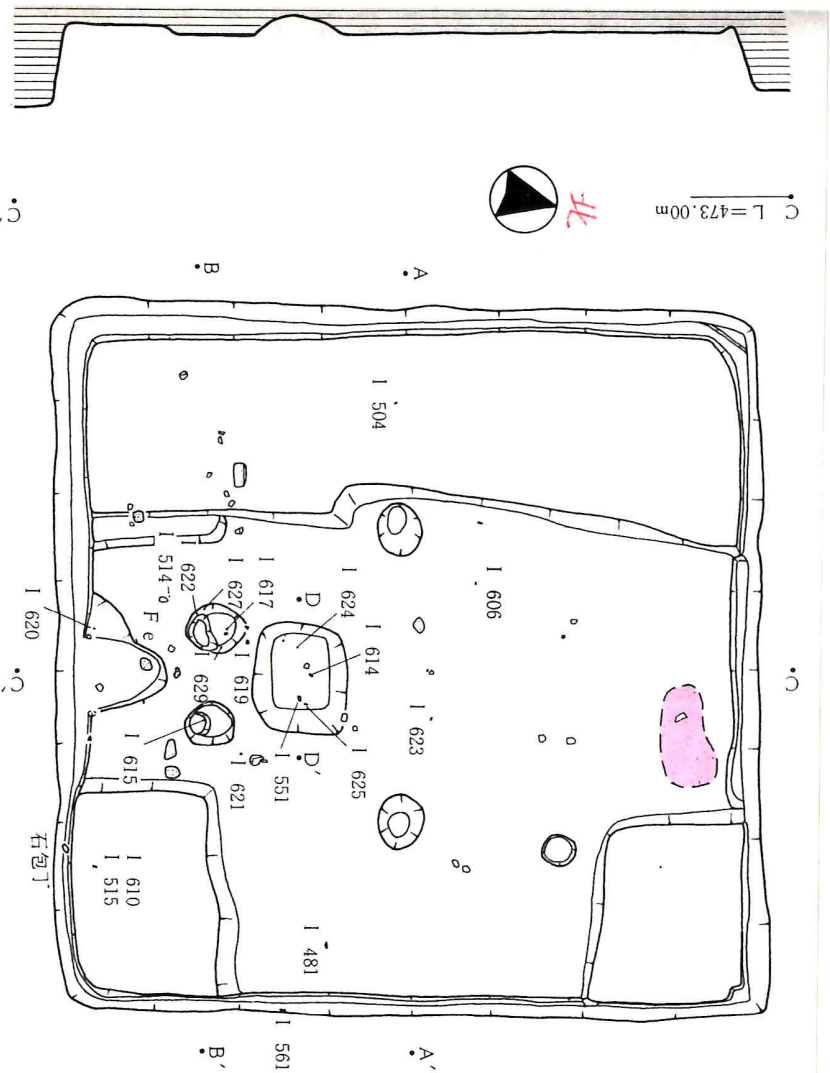
欠損 - 郭令が
小林 532² = 中水

④ 686² - 5/ 16 行に
② 21 ~ 24 頁参照 と記述
輝度

トル
 いる。内面は、
 ・なお、この土器の同一個体の破片が、14号
 住居跡からも出土した。
 という。(2) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
 ※5 以外は全て、どこか欠損している。
 ※5 はともかく、他の土器は皆、廃村となっ
 た後に入り込んできたのだらうと思われ。
 ③ 13号住居跡。あと
 ④ 13号住居跡の規模、平面形態および方位は
 隣り合う14号住居跡と酷似する。出土遺物も
 相互に密接な係りがあり、同時期の住居跡と
 みられる。(第170図・174図・175図参照)
 ⑤ 床面には、北壁の中央際などに、ベンガラ
 のちやくがみられる。(第174図・北端の長楕円破
 線域あたり)
 ⑥ 炉とその周囲には、鉄片など鉄製品の分布
 がある。炉口に炭化物がこびりついており、鍛冶
 工場の様子を如実に残す。(遺構配置図)
 ※但し、13号遺跡の場合、第170図に示すとお

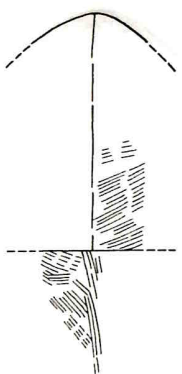
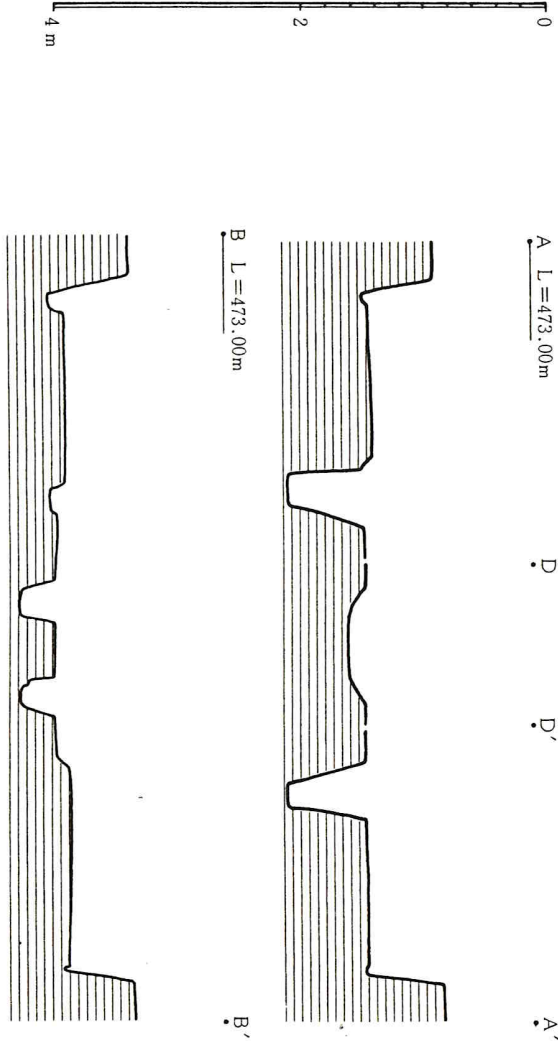
カラ-

・右頁全面に
大々く明かし
掲載下さい



687P-3/9

292



(免田式土器) 34

(刻み目突帯部分) 35

(く)内、追加
元載(7枚)17
下さい。

1309 1409 第174図 狩尾・湯の口遺跡13号住居跡実測図及び出土土器
1309 狩尾遺跡群、熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、38頁参照。

次頁から

687P-3/9

不要

リ、南側^{みなみがわ}一帯^{いつたい}が^{たか}高く、北西^{きたせい}部分^{ぶぶん}が^{ひく}低くなつて
いる。
・そこで、13号^{ななほう}遺跡^{いしき}の南^{みなみ}方^{ほう}域^{いき}に散^ちらばつていた
小土器^{しょうどき}片^かや、南^{みなみ}壁^{かべ}上^{じやう}に置^おいていた鉄片^{てつぺん}・石包^{いしほう}
丁^{ちやう}などか^{すこ}ー^ずつ住居^{じゅうきやう}内^{ない}の南側^{みなみがわ}部^ぶ令^{れい}
へ入^{はい}つてきたのだらうと想^さ象^{さう}される。
■土器^{どき}の小破片^{しょうは}のほか、石包^{いしほう}丁^{ちやう}か、南^{みなみ}壁^{かべ}際^{ぎわ}の
中層^{ちやうそう}から出^い土^{つど}した。
・鉄製^{てつせい}品^{ひん}は主^{しゅ}要^{よう}なものの^{ただ}けで二五^{てんご}点^{てん}有^あり、鉄^{てつ}
鍬^{くわ}が二^{ふた}点^{てん}、鉋^かの破片^はとみ^みられるもの三^{さん}点^{てん}、年^{とし}て鉄^{てつ}
鍬^{くわ}一^{いっ}点^{てん}や、こ^これ以外^{いがい}は鉄片^{てつぺん}で、炉^ろと^ろの南^{みなみ}の二
つの小穴^{こあな}付^{つき}近^{きん}が分^{ぶん}布^ぷの中^{ちやう}心^{しん}である。
と^とい^いう。(②一三七一三九頁^{ページ}参^{さん}照^{しやう})
*左^{ひだり}々^々から住居^{じゅうきやう}内^{ない}にあつた鉄^{てつ}の^と、建^{けん}物^{ぶつ}外^{がい}か
ら流^{りゅう}入^{にゅう}したものの^との識^し別^{べつ}はむ^むつか^かい^いそう^{そう}であ

47^p 姓尾 (55) ヲコ 漢テイ
 大カ¹ 141 口部 漢漢
 大カ¹ 225⁹ 口部 漢漢
 大カ¹ 328⁹ 口部 漢漢

$$687^D - 4/9$$

前2頁 狍尾遺跡群 39°
② 686° 7/12 15斤 11

④ 687-195

前頁

4 14号住居跡（緩やかな谷に面する住居跡）
は、13号住居跡と隣接している。（第170、174、175図参照）
床面上にはベンガラの散布が著しく、なか
でも北壁の中央際近く、および二ヶ所の小穴の
両脇に、大量の集中した累積部分があり、数
次にわたる散布行為がみられる。
~~住居内の中央部一帯が土器留りとなっており、
中層以下に大量の各種土器片を含む。~~
* もーかーたら、
へ南方域高所の土器捨て場から、次々
に↑↑↑転がり落ちてきたへぼ原形を保つ
ている多数の土器が、この14号住居内
の凹陥部分へ入り込んで留まった。
という情況を示唆しているのだからどうか。
四九点の土器の図が掲載されてお、口部
から底部まで明瞭なものが八点ある。
・それらのうち、本住居跡で唯一の完形の鉢
形土器一点（55）が正立位で出土した。（第176図参照）
鉄製品として、は、手鎌四点および鉋二点か

コクヨ ケー20 20×20

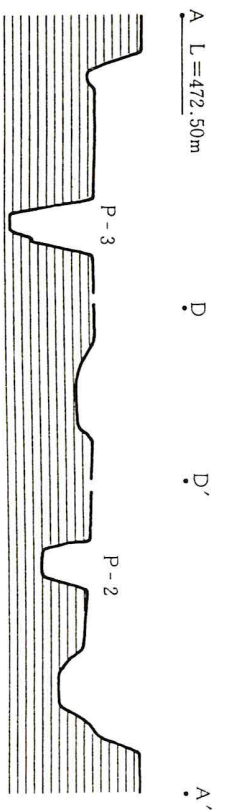
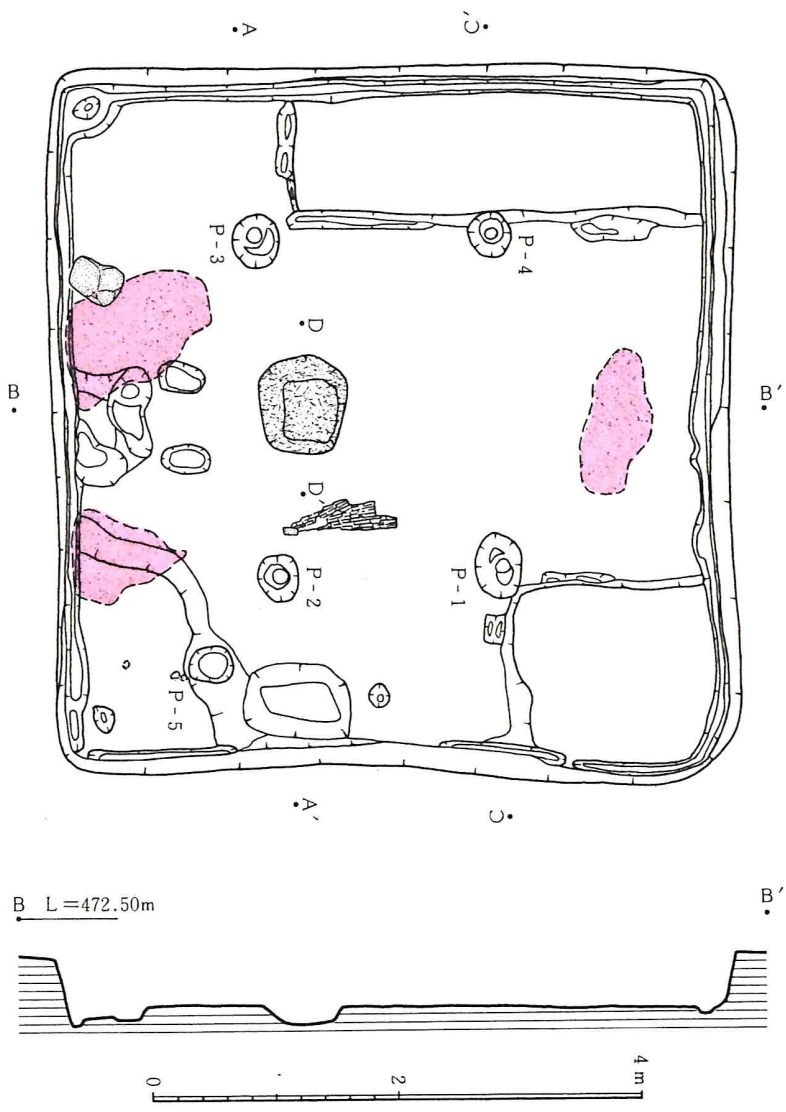
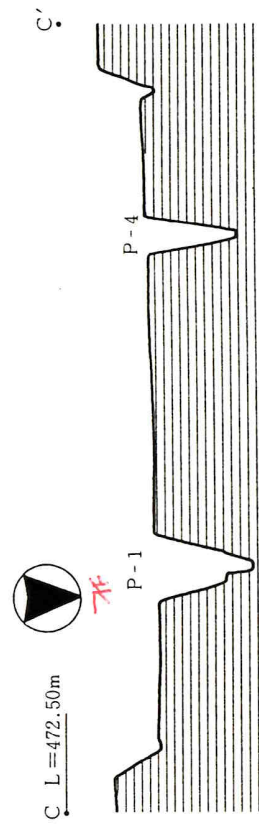
完成 ⑤ $687 - \frac{7}{11}$
1759

情说

294 ③305¹⁸-6/10 1994¹⁸ 土器捨て場
④678¹⁸-3/3 夏田舎野のな

谷火面村。

カラー
左頁全面に、大々掲載下さい。



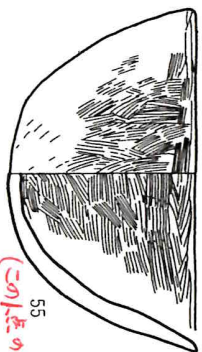
1404 第175図 狩尾・湯の口遺跡14号住居跡実測図

1304
1304
狩尾遺跡群
熊本県文化財調査報告 第131集、熊本県教育委員会、40頁参照。
半字分7414

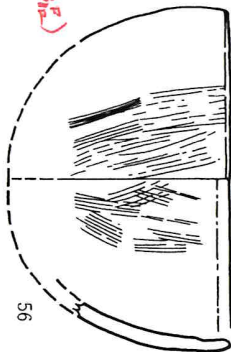
687^p-5/9

大正9年 39頁 10行

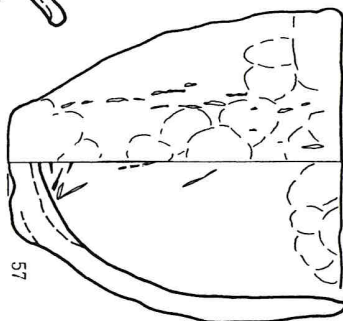
右頁全面に、大正5年に出刊掲載下さい。 数字も大正5年下さい。



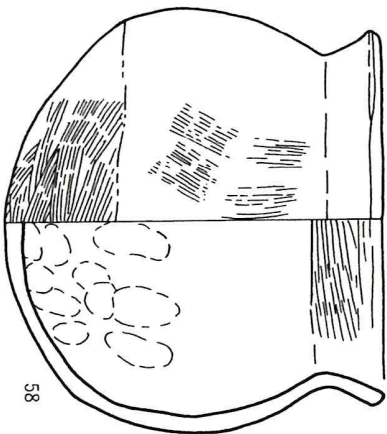
55 (二)点のみ定形品



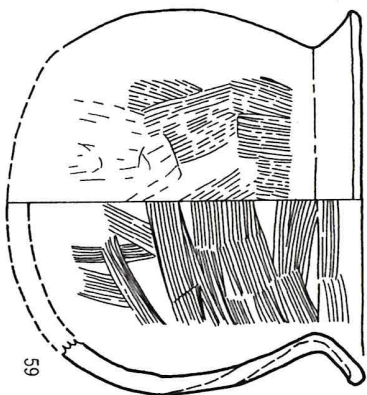
56



57

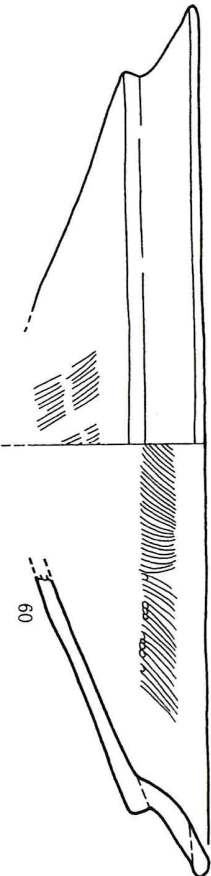


58

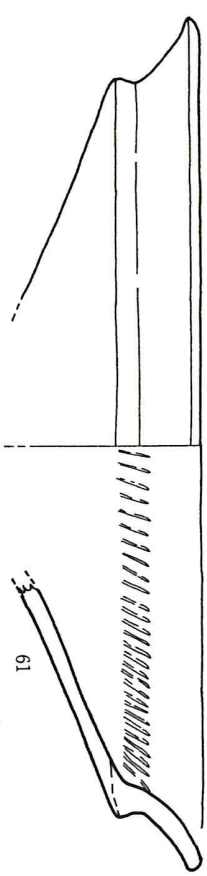


59

687 6/9

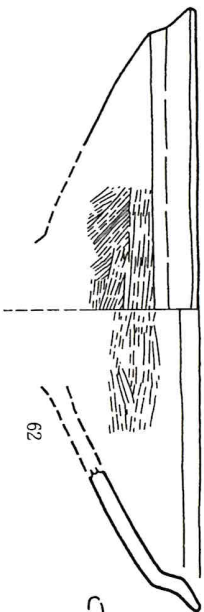


60

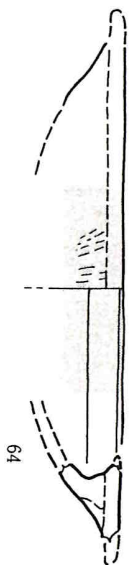


61

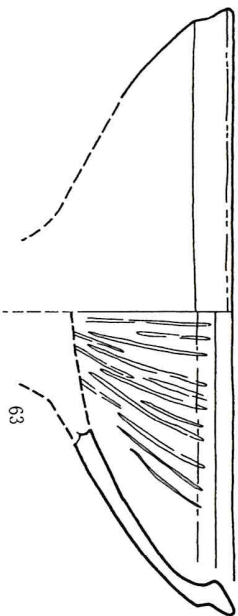
60~63の写真が、図版114に掲載
されてゐる



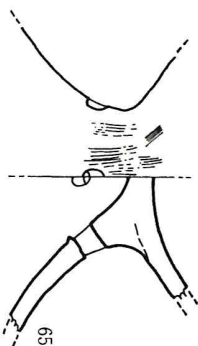
62



64



63



65

0 10 20cm

1359

1409

第176回

狩尾・湯の口遺跡14号住居跡出土土器

大正9年 39頁 10行 狩尾・湯の口遺跡14号住居跡出土土器 第131集、熊本県教育委員会、47頁、図版114参照。

高土形土器 60、61は、写真図版136 成川遺跡出土の高土形土器と酷似している。

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

大正9年136

685-1/4

① 神の託紙 阿蘇のものばかり展

687-7/9

→ 阿蘇のものが展 37, 45^P

見出し 出土品。ただし、床面ではなく、中層の
土器片に交りつての出土である。
という。② 一三九五六頁参照
※ この鉄製品は、竪穴式住居の上縁部に
置かれていたのではなからうか。
因みに述べると、
阿蘇谷の狩尾遺跡群や下扇原遺跡では、
住居内に、
大量のベンガラを撒いたり、
置いたり、
② あたかも
盛り塩の
ようにブロッ
ク状に
置いたり、
ベンガラは、葬儀の際に用いられただけで
なく、住居内での（清め等の）祭儀において
も使われたのだろう。
これは、ベンガラが豊富にある阿蘇のムラ
ならではの行為なのかも知れない。
という。① 一四五頁参照
盛り塩の起源の古さを物語っているの

ヤ×ル。
これは、風水だろ

縁起を祝う
とある
天つき
改行

687P 8/9
字7キ 【阿蘇の鉄】 688P
-1/4

チール 新や(11-378)
CaCO₃ 新や(11-381) ←これは不溶性
この塩は、水に溶ける、超「塩」

だろ うか。
扶余系殷民達が暮らしていた他地域の住居
では、ベンカウでなく、塩・水・酒
と使用していた可能性もあろうか、未だ
確認されていないようだ。
現代の盛り塩と同様に、塩・水・酒
状に積み上げて床面上に置いたものならば、土層
で、松・菊・型・住居内などから、大量の塩が
検出されることだろう。
盛り塩について、こう記されている。
料理店・料亭・下寄席・落語・講談・洋
瑠璃・浪花節・手品・音曲など、大衆演芸の
興行場などで、縁起を祝って門口に塩を
盛ること、また、その塩・口塩ともいう
とある。(「広辞苑」へ盛り塩参照)
料理店等の出入口外側の左右に、盛り塩が
置かれていたのは、よく目にする光景であ
る。(写真図版134参照)
そのほか、玄關の内側の隅や、靴箱の上、
のり、タタミの下、等に置いたりする。
紫月、番帳、下駄、エクスナ、シ、
三年四月五日発行、四の二頁参照。

298
「盛り塩」と、「根の松」(根引松)

通宜力外

適宜为上

一折

・右頁右半分に大きく「お出し」掲載下さい。

687^P - 9/9



299

٢٤

白二土(原本ニ鹽)
↑ ↑ ↑
↑

たて石上賀茂神社は、原宿用代原館の棚にある。

1129 紀上

主ナカ
上ノ坂
下ノ坂

1295

京都祇園

1429

陈国材

134

五、

15

蘇

收

1000

10

性引木

8.1
K18,
201

20

京都五花街 溝縁 光村推古書院 平成22年12月18日発行 8頁参照
 出入口の両側に 盛り塩と 根の松と 交付の 配置され 30